

ケ *Stropharia aeruginosa* (Fr.) Quél. とほとんど異ならない。大津市石山千町のアカマツ林および福井県^{おののう}遠敷郡名田庄村、三国峠付近の落葉樹林内で採集した。

111) アシボソクリタケ (新種)。クリタケ *Naematoloma sublateritium* (Fr.) Karst. に比しやせ形で茎は細長く、あまり多数が束生することはない。京都大学芦生演習林、ドイツウヒの植林内、くさった切株付近で採った。

112) アカヒダワカフサダケ (新種)。ひだおよび胞子紋がトビ色～エビ茶色をおびる点で *Hebeloma sarcophyllum* Peck に近い種類であるが、フランスの菌学者 M. Jossierand 博士よりの私信によれば、*H. sarcophyllum* はより大形、肉質の菌で、シスチジアの形も本菌とは異なるという。大津市三井寺山内のシイ林および市内田上^{たなかのいいしやま}石居町のアカマツ林で採集。

113) オオササタケ (新種)。ササタケ *Cortinarius cinnamomeus* (Fr.) Fr. に近似の種類であるが、大形で、ひだの実質は KOH 液により青変する性質がある。大津市石山平津町のアカマツ林で採集。

114) トガリニセフセンタケ (新種)。小形、黄土色の種類で、かさははじめ円錐形をなし先端がとがる。大津市田上黒津町のシイ林内で採る。

115) クサイロハツ (新種)。かさは草色、ひだはクリーム色の種類で、シラカンバ属の樹下に発生し、食用にすることができる。京都大学芦生演習林の落葉樹林内、ミズメの樹下で採集。

○アカヤシオの白花品 (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: On white flowered form of *Rhododendron pentaphyllum* Maximowicz var. *nikoense* Komatsu.

アカヤシオは周知の如く、主に本州中部、関東の山地を中心に分布しており、陽春淡紅色の美花をつける。本年 (1965) 5 月、永年に互り東三河のフロラ調査に従事されている鳥居喜一氏の御令息栄一氏 (現在東京歯科大学勤務) が、三河鳳来寺の向陽崖地 (岩壁) で本種の白花品を見出した。これにユキヤシオの名を与え、次のように記載しておきたい。

Rhododendron pentaphyllum Maximowicz var. *nikoense* Komatsu

form. **abliflorum** Asai et E. Torii, f. nova

Corolla albi. Cetera ut in typico.

Nom. Jap. Yuki-yashio (nov.).

Hab. On forest of Mt. Horaizi-san, Prov. Mikawa, central Honshu (E. Torii —May 4, 1965, Type in TI.). (東京歯科大学)

○ハキダメガヤが高知でとれた (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: *Dinebra arabica* (Gramineae) found at Kochi-city in island Shikoku

ハキダメガヤ (*Dinebra arabica* Jaquin) は熱帯アフリカ産のイネ科植物で、奥山春季氏が 1931 年山形県で採集され、本誌 19: 130 (1943) に命名発表したものである。この他にも小川由一氏が採集した標本が資源科学研究所にあったが、戦中に焼失してしまった。本年 (1965) 8 月 9 日、千葉大学薬学部長の荻庭丈寿氏により、高知市西部の海浜で採集されたので、大井、奥山両氏に検定してもらったところ、科学博物館所蔵のアフリカからの標本と引合せて、同一物と認定されたので、この植物が高知でとれたことをここに記録する。もちろんこんなものが残存すると思われないから、帰化植物にはなるまい。なお、奥山氏のとられた標本は科学博物館標品 No. 36384-5 で、その写真は私の「帰化植物」(1950) にある。

(東邦大学薬学部)

○ニオイシャジン小記 (北川政夫) Masao KITAGAWA: Brief notes on *Adenophora verticillata* Fisher

ニオイシャジンは日本のツリガネニンジンやサイヨウシャジンに近縁の大陸系の種類である。この学名として私は以前 *Adenophora tetraphylla* (Thunberg) Fischer を選んだこともあるが、それは誤りで、この名称は日本産の類につけられたものであるからニオイシャジンには当てはまらない。従って、本種の学名につき再検討を要するが、その前にこの種と日本のツリガネニンジン系の種類との種的な差異点を述べて見る。

ニオイシャジンは一般に丈が高く、最高のものでは 150 cm 位に及ぶ。葉は質がやや厚くて硬く、一節に 3~6 個宛輪生する。花序は細長く、枝は通常完全に輪生している。花は多数で小さく、長さは 1~1.3 cm ある。また最もよい特長は萼裂片にあり、それらは極めて小さく短く、のみ形をなし、全辺で先端はやや肉太くなり、色は黒味を帯び、長さは 1~2.5 mm 位しかない。花冠は筒状鐘形乃至鐘形をなし、濃碧色を呈する。こうした形質を参酌し、日本のものとは全然別の独立種として考える。この種もツリガネニンジンと同様に、葉の広狭、毛の有無に甚しい変化性を示し、学者によっては若干の細かい変種や品種に分けているが、結局連続変異に外ならず、無理に区別しなくてもよいようである。

本種は 1776 年に、Pallas 氏によって *Campanula verticillata* Pallas として発表されたのである。しかし、Hill 氏が 1765 年に同じ名を他種に用いている為無効名となる。次に、これを *Adenophora* 属に移した名は *A. verticillata* Fischer であるが、「植物命名規約」(1956) の Article 72 の Note の欄に従えば、こうした組合せは先行する異種同名のない場合基本種名と一応関係のない新名として採用することが出来る。故に、Pallas 氏の名を捨てて、改めて新形容語を用意する必要もないわけである。

以上をまとめて、次の如く整理する。

Adenophora verticillata Fisher in Mém. Soc. Nat. Mosc. 6: 167 (1823), emend. ut nom. nov.; De Candolle, Monogr. Campan. 356 (1830): Prodr. 7: 492 (1838), pro maj. part., excl. syn. *Campanula tetraphylla* Thunberg; Kitagawa